



TITLE:

尿管自然破裂をきたした転移性尿管腫瘍の1例

AUTHOR(S):

善本, 哲郎; 辻本, 幸夫; 北村, 憲也; 畔, 立子

CITATION:

善本, 哲郎 ...[et al]. 尿管自然破裂をきたした転移性尿管腫瘍の1例. 泌尿器科紀要 1995, 41(1): 57-60

ISSUE DATE:

1995-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/115428>

RIGHT:

尿管自然破裂をきたした転移性尿管腫瘍の1例

市立川西病院泌尿器科 (医長: 田口恵造)

善 本 哲 郎

兵庫医科大学泌尿器科学教室 (主任: 生駒文彦教授)

辻 本 幸 夫

北村泌尿器科 (院長: 北村憲也)

北 村 憲 也

市立川西病院内科 (部長: 伊藤芳晴)

畔 立 子

SPONTANEOUS RUPTURE OF THE URETER CAUSED BY METASTATIC URETERIC TUMOR: A CASE REPORT

Tetsuro Yoshimoto

From the Department of Urology, Kawanishi City Hospital

Yukio Tsujimoto

From the Department of Urology, Hyogo College of Medicine

Kenya Kitamura

From Kitamura Clinic

Ritsuko Kuro

From the Department of Internal Medicine, Kawanishi City Hospital

Spontaneous rupture of the right upper ureter caused by metastatic ureteric tumor in an 80-year-old man is reported. He was admitted to our hospital with right lower abdominal pain. Ultrasonography showed mild right hydronephrosis and a low echogenicity mass under the right kidney. Drip infusion pyelography and abdominal computerized tomography showed extravasation of contrast medium around the right upper ureter. Retrograde pyelography was unsuccessful because of edema of the bladder wall. Right ureterocutaneostomy was performed under the diagnosis of spontaneous rupture of the right ureter. The right ureter was completely obstructed 3 cm below the point where it crossed the common iliac artery. At this site, the ureteric wall was hard, thickened, and adherent to the surrounding tissue. The lesion was a metastatic adenocarcinoma. The origin of the tumor could not be found, but pancreatic cancer was suspected on the basis of elevated CEA and PSTI levels. He died of peritonitis carcinomatosa at 8 months after surgery. Thirty three cases of spontaneous rupture of the ureter and 60 cases of metastatic ureteric tumor have been reported in Japan. However, our patient is the first reported case of spontaneous rupture of the ureter caused by a metastatic ureteric tumor in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 41: 57-60, 1995)

Key words: Spontaneous rupture of ureter, Metastatic ureteric tumor

緒 言

転移性尿管腫瘍は本邦において60例の報告がみられるが¹⁻⁹⁾, 上部尿路の自然破裂をきたすことは稀であ

る。今回われわれは尿管自然破裂をきたした転移性尿管腫瘍の1例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：80歳，男性

主訴：右下腹部痛

既往歴：55歳時に胃2/3切除術（胃潰瘍？）。72歳時に胆管結石にて胆嚢摘出術。79歳より糖尿病，高血圧症にて加療を受けている。

家族歴：特記すべきことはなし

現病歴 1992年8月12日より右下腹部痛が出現ししだいに増強するため近医を受診したところ精査目的にて当院の内科に紹介入院となった。当科へは同年8月21日に右尿管結石の疑いにて紹介受診された。

現症：身長 147 cm，体重 39 kg，胸部には理学的に異常所見を認めず。腹部所見では右下腹部に圧痛を認めた。表在リンパ節は触知しなかった。

入院時検査成績：WBC 8,600/mm³，CRP 3.75 mg/dl，赤沈1時間値 22 mm と炎症所見を認めた。血液生化学検査では ALP 16.2 U，CPK 144 mu/ml，Cr 1.3 mg/dl，T-Bil 2.3 mg/dl，血糖 248 mg/dl と上昇を認めた。止血検査では APTT が48秒と軽度延長を認めるのみであった。腫瘍マーカーでは CA125 が48 U/ml と上昇しており，CEA，CA19-9，SCC 抗原，PSA， γ -Sm は正常であった。尿検査所見では尿糖が(2+)である以外は異常を認めなかった。

超音波所見：右の腎盂腎杯は軽度拡張しており，腎盂尿管移行部の2 cm 下方まで軽度拡張した尿管を認めた。また右腎下方には内部エコー均一な低輝度腫瘍を認めた (Fig. 1)。

X線検査所見：DIP では右側は軽度水腎水管を示し，右上部尿管の内側に造影剤の溢流を認めた (Fig. 2)。腹部造影 CT でも右上部尿管の前後に造影剤の溢流を認めた (Fig. 3)。その後右逆行性腎盂造影を試みるも右尿管口付近は浮腫状で右尿管口を確認できなかったため施行できなかった。なお，膀胱内には腫瘍性病変は認めなかった。

以上より右尿管破裂の診断のもとに1992年9月17日手術を施行した。

手術所見：右腰部斜切開にて後腹膜腔に到達した。後腹膜腔には淡黄色で清な液が貯留していた。右尿管に明らかな破裂部位は確認できなかったが，血管交叉部より3 cm 下方の尿管は壁が硬く肥厚しており，完全な閉塞を認めた。また周囲との癒着も強かったが尿管外に明らかな腫瘍性病変は認めなかった。狭窄部以下の尿管の剝離は困難であったため，狭窄部尿管を一部生検したのち尿管皮膚瘻術を施行した。

病理組織所見：尿管上皮には悪性所見を認めず，核

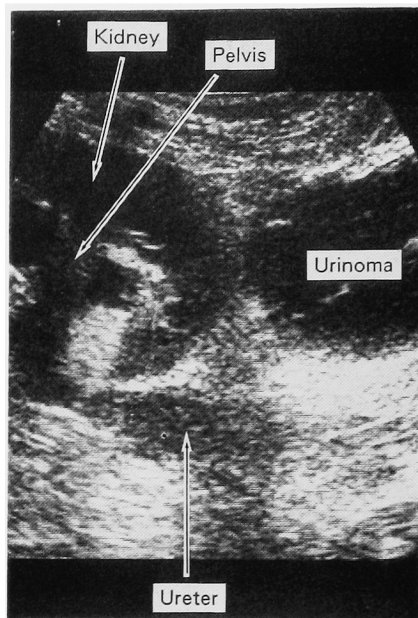


Fig. 1. Ultrasonography showed mild right hydronephrosis and low echoic mass under the right kidney.

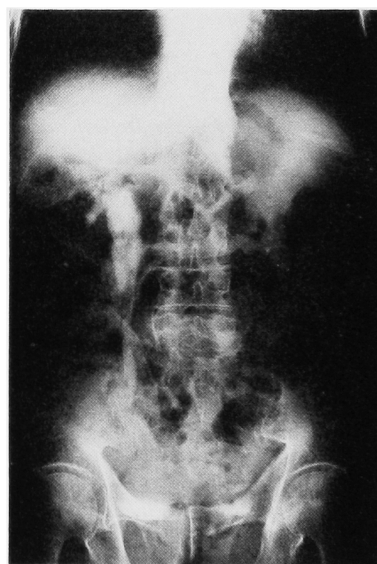


Fig. 2. DIP showed the extravasation of contrast medium around the right upper ureter.

異型，構造異性のある管状構造の腺を散在性に認め転移性腺癌と診断された (Fig. 4)。

以上より右尿管転移による尿管破裂と診断し，原発巣検索のため諸検査施行したが不明であり，術後8ヵ月目に癌性腹膜炎にて死亡した。

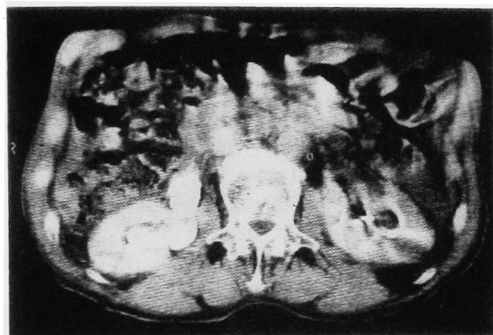


Fig. 3. Abdominal CT showed the extravasation of contrast medium around the right upper ureter.

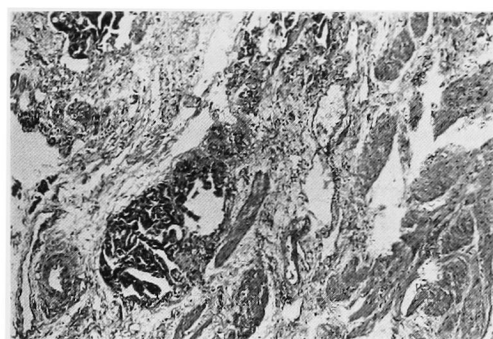


Fig. 4. Submucosal area of stenotic region of the right ureter showed metastatic adenocarcinoma. (H&E, ×25)

考 察

本邦での尿管自然破裂は児玉ら¹⁰⁾が31例を集計しているが、その後2例の報告^{11), 12)}があり自験例は34例目である。本症は男性17例、女性17例と性差なく、患例は右14例、左20例と左右差も認めなかった。破裂部位は上部尿管が24例(70.6%)、中部尿管が4例(11.8%)、下部尿管が1例(2.9%)、不明が5例(14.7%)であり上部尿管に多いのは構造的に弱いためといわれている¹⁰⁾。自験例の場合、肉眼的に破裂部位は確認できなかったが、DIPやCTや手術所見から腫瘍の存在した部分の尿管の閉塞による内圧亢進により上部尿管が破裂したと考えている。原因としては結石によるものが19例(55.9%)と最も多く、転移性尿管腫瘍によるものは自験例が本邦1例目である(Table 1)。治療はendourologyの普及と進歩により重症例でなければ非観血的治療で治癒する例が増加しており1983年以降の報告例では16例中10例(62.5%)が非観血的に治療されている。しかし自験例の様に悪性腫瘍が原因となる場合もあり、原因不明の場合はたとえ尿管破裂

Table 1. Cause of ureteral rupture in Japan

ureteral stone	19 cases	(55.9%)
ureteral stenosis	3	(8.8%)
suspect of ureteral stone	2	(5.9%)
metastatic ureteral tumor	1*	(2.9%)
ligature of ureter	1	(2.9%)
bladder cancer	1	(2.9%)
diverticulum	1	(2.9%)
unknown	6	(17.6%)
total	34 cases	

* Present case

Table 2. Origin of metastatic ureteral tumor in Japan

stomach	25 cases	(41.0%)
kidney	14	(23.0%)
prostate	3	(4.9%)
uterus	2	(3.3%)
colon	2	(3.3%)
breast	2	(3.3%)
pancreas	2	(3.3%)
gallbladder	2	(3.3%)
rectum	2	(3.3%)
testis	1	(1.6%)
pelvis	1	(1.6%)
bile duct	1	(1.6%)
unknown	4	(6.6%)
total	61 cases	

が軽症であっても悪性腫瘍を念頭に置く必要があると考える。転移性尿管腫瘍を Presman D. and Ehrlich L.¹³⁾は 1) 組織学的に腫瘍細胞が尿管の血管周囲リンパ組織あるいは血管に認められる、2) 尿管壁の一部に腫瘍細胞が見られ隣接組織からの直接浸潤がない、のいずれか一方を満たすことと定義しておりこれが一般に認められている。自験例の場合、手術所見より尿管外に明らかな腫瘍性病変は認めず、病理組織所見では尿管上皮には悪性所見は認めず尿管壁に腫瘍細胞を認めていた。以上より転移性尿管腫瘍と判断した。本邦における転移性尿管腫瘍はわれわれの調べたかぎりでは自験例を含め61例報告されている。原発巣は胃が25例(41%)と最も多く、ついで腎が14例(23%)であり、両者が60%以上を占めていた(Table 2)。自験例の場合、25年前に胃2/3切除術を受けておりその詳細は不明であったが、胃カメラでは異常所見は認めなかった。また各種X線検査、腹部超音波検査にて、腎、結腸、直腸、胆管には明らかな腫瘍性病変は認めず、他院にて摘出された胆嚢も悪性所見は認められなかった。また PSA、 γ -Sm は上昇しておらず、前立腺、

陰囊内容にも触診上は異常所見を認めなかった。しかし術前より 48 U/ml と軽度上昇していた CA 125 が術後 283 U/ml と上昇しており、また術後 PSTI (pancreatic secretory trypsin inhibitor) が 113 ng/ml と上昇していることより膵癌の存在を示唆されたが確定診断はえられなかった。原発巣と転移部位が明らかな転移性尿管腫瘍 52 例では患側については右 15 例、左 25 例、両側 12 例で、転移部位は 64 尿管中上部 20 例、中部 23 例、下部 24 例と共に明らかな差を認めなかった。また原発巣と転移部位との関係を見ると、胃原発 24 例 33 尿管中では転移部位は上部が 15 例、中部が 12 例、下部が 9 例でありやや上部尿管に多い傾向があった。腎原発 10 例 10 尿管では転移部位は上部が 1 例、中部が 4 例、下部が 5 例であり中部尿管以下に多いのは腎摘出後の遺残尿管転移が多いためであると考え。転移性尿管腫瘍の予後は藤本ら¹⁾は 75% が 6 カ月以内に大薮ら⁶⁾は半数以上が 1 年以内に死亡していると報告している様に全身転移の 1 つとしておこることが多く不良である。自験例も術後 8 カ月で死亡しており予後不良であった。

結 語

80 歳、男性で尿管自験破裂をきたした転移性尿管腫瘍の 1 例を報告するとともに本邦報告の尿管自然破裂 34 例、転移性尿管腫瘍 61 例について文献的考察を行った。

本論文の要旨は第 142 回日本泌尿器科学会関西地方会にて発表した。

文 献

- 1) 藤本宣正, 市川靖二, 中野悦次, ほか: 転移性尿管腫瘍の 1 例. 西日泌尿 49: 137-142, 1987
- 2) 三浦秀信, 岩佐 厚, 菅尾英木, ほか: 子宮頸癌を原発とした転移性尿管腫瘍の 1 例. 泌尿紀要 35: 1577-1580, 1989
- 3) 田村隆美, 上原 徹: 直腸原発転移性尿管腫瘍. 臨泌 43: 793-796, 1989
- 4) 片山孔一, 加藤良成, 江左篤宣, ほか: 転移性尿管腫瘍の 1 例. 泌尿紀要 36: 343-346, 1990
- 5) 横木広幸, 山崎陽治, 石部知行: 転移性尿管腫瘍の 1 例. 西日泌尿 53: 1070-1072, 1991
- 6) 大薮裕司, 鮫島 博, 江藤耕作: 転移性尿管腫瘍(腺癌)の 2 例. 泌尿器外科 3 (臨増): 467-470, 1990
- 7) 入江 啓, 青 輝昭, 平田 滋: 胆嚢腺癌尿管転移の 1 例. 泌尿器外科 4 (9): 1009-1011, 1991
- 8) 吉永英俊, 松下和弘, 安芸雅史, ほか: 遺残尿管転移を起こした腎細胞癌の 1 例. 西日泌尿 54: 482-485, 1992
- 9) 久保博幸, 川原和也, 西山賢龍, ほか: 腎摘除術 9 年目に発見された腎細胞癌の遺残尿管転移の 1 例. 西日泌尿 55: 1129-1133, 1993
- 10) 児玉光博, 植田 覺: 尿管自然破裂の 1 例. 西日泌尿 53: 258-262, 1991
- 11) 米山威久, 保坂恭子, 清河英雄: 尿管自然破裂による尿管結石の尿管外脱出. 臨泌 44: 809-811, 1990
- 12) 永松秀樹, 山田拓己, 川上 理, ほか: 上部尿路自然破裂の 2 例. 西日泌尿 55: 1273-1277, 1993
- 13) Presman D and Ehrlich L: Metastatic tumors of the ureter. J Urol 59: 312-325, 1948

(Received on April 5, 1994)
(Accepted on September 24, 1994)